

Ⅲ. 各ゾーンの計画

目 次

1	クロマツ疎林ゾーン	34
2	芝地・花木林ゾーン（春日野園地他）	61

●植栽計画と実施計画について

本章では植栽計画と実施計画を併せてとりまとめている。植栽計画は、奈良公園の植栽のあるべき姿もしくは理想像を示したもので、これを実現するためには必要な整備を段階的に実施し、その後十分に樹木を生長させることが必要となることから相当長期的な計画である。これに対して実施計画は、当面実施すべき整備内容についてまとめたものであり、計画実現には10年から20年程度の期間が必要であると考えられる。各ゾーンの計画内容を理解し把握するためには、この二つの内容の両方が必要であることから、併せて記載することとした。なお、実施計画のうち土壤改良や整備工程等に関する内容については、関連性が低いことから割愛した。

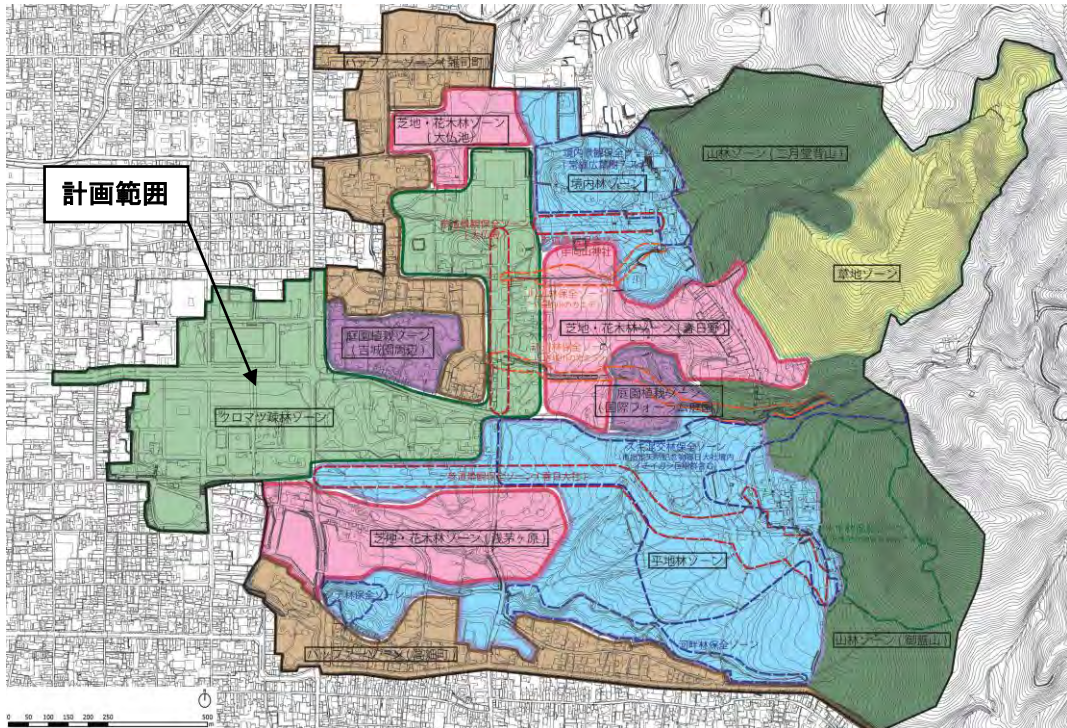
1 クロマツ疎林ゾーン

1-1	クロマツ疎林ゾーン植栽計画	35
1-2	クロマツ疎林ゾーン南西部実施計画	45

1-1 クロマツ疎林ゾーン植栽計画

(1) 計画範囲

計画範囲は、クロマツ疎林ゾーン全体とする。



図：計画範囲

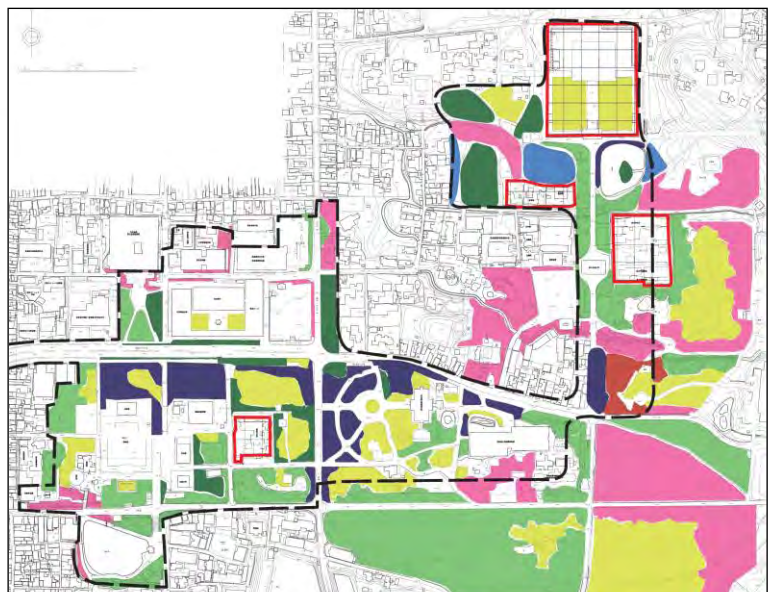
(2) 計画地の植栽・景観の特性

特性-1 クロマツ疎林ゾーンの高木はクロマツが主体で、ゾーン全体に分布する。

○奈良公園内のマツの70%以上が、クロマツ疎林ゾーン内に位置する。

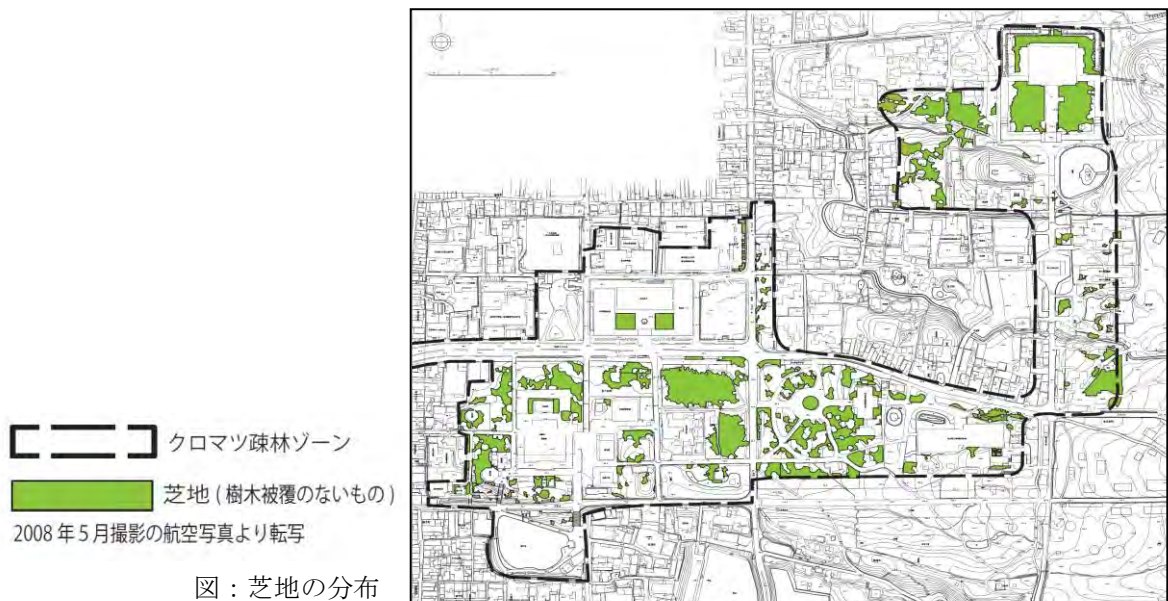
※奈良公園平坦地(開放地)内のマツ類1421本のうちクロマツ疎林ゾーンに1016本位置する。(2013年9月)

○クロマツ疎林ゾーンは、クロマツ純林、クロマツ優占林、クロマツ・広葉樹混交林が多く占める。



図：クロマツに着目した林相区分

特性-2 クロマツ疎林ゾーン内の芝地はゾーン全体に分布しており、中でも公園区域と博物館構内、東大寺大仏殿西側の比率が高い。



特性-3 クロマツ疎林ゾーンは、古くから風致を高めるために植栽され、現在も奈良公園の歴史文化的な風致景観を保全・継承している。

○興福寺や東大寺大仏殿の一带は、江戸期よりマツが多く見られた。



図：奈良名所東山一覽之図（幕末期）

○古くから風致のために植栽されており、それが現在も継承されている。

【主な植栽記録】

- ・嘉永3年(1850) 東大寺、興福寺境内に桜、楓を植栽
- ・明治8年(1875) 興福寺境内に花木植栽
- ・明治21年(1888) 猿沢池池畔に枝垂柳、堤には霧島躑躅を植栽
- ・明治22(1889)～同36年(1903)公園平坦部に松、桜、楓、梅、百日紅、柳など約9000本を植栽
- ・明治28年(1895) 帝国奈良博物館 開館(松植栽)
- ・昭和40年(1965) 奈良の八重桜が県花指定 以降、各園地に八重桜を3000本以上植栽
- ・昭和55年(1980) 公園開設百年記念植樹で公園、社寺、博物館にクロマツ2300本を植栽

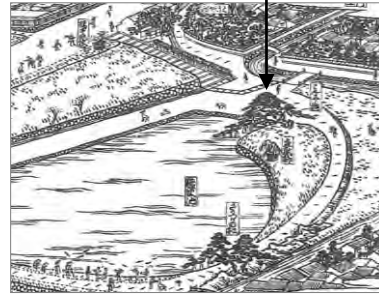
○クロマツ疎林ゾーンは名木や古木、いわれのある木が多く、枯死した樹木も更新されている。

マツの名木「花の松」



撮影年代不明（金堂及五重塔）

いわれのある木「衣掛柳」

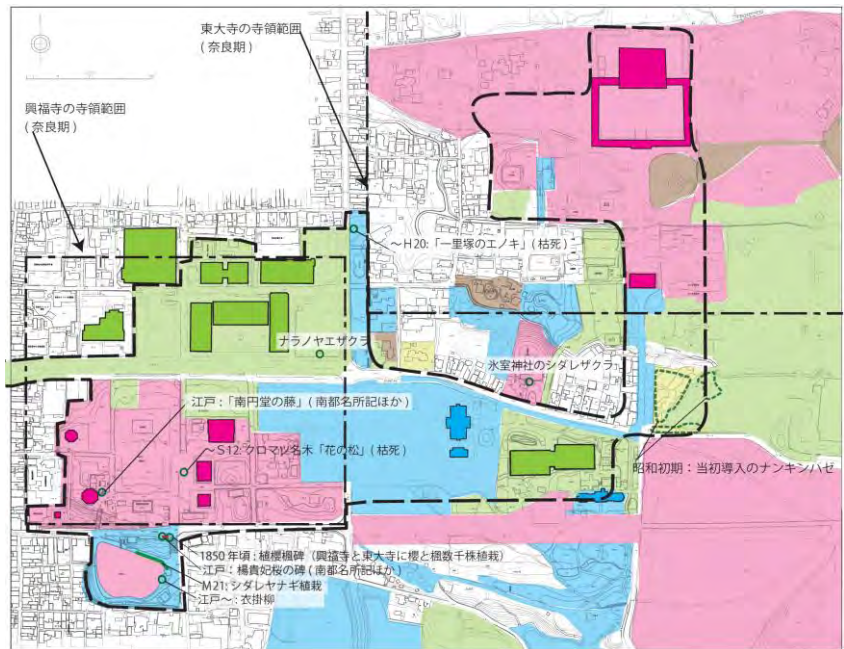


大和名所図会」寛政3年(1791)

花の松 (興福寺東金堂前)	クロマツ	弘法大師の御手植えとされ、元禄時代に植えられた後代の花の松は樹高 25.5m、幹周り 5.4m の枝を大きく伸ばした立派な樹形であったが、昭和 12 年 (1937) 枯死。
衣掛柳 (猿沢池池畔)	シダレヤナギ	奈良時代の采女の説話にまつわる柳として、江戸時代の名所案内等に記される。

特性-4 クロマツ疎林ゾーンは土地利用や植栽整備の歴史が植栽や景観に色濃く反映されている。

○土地利用、植栽、建築物の時代性は、興福寺と東大寺に関連する奈良時代から続くエリアと、都市公園や博物館等に関連する明治以降のエリアに大別される。

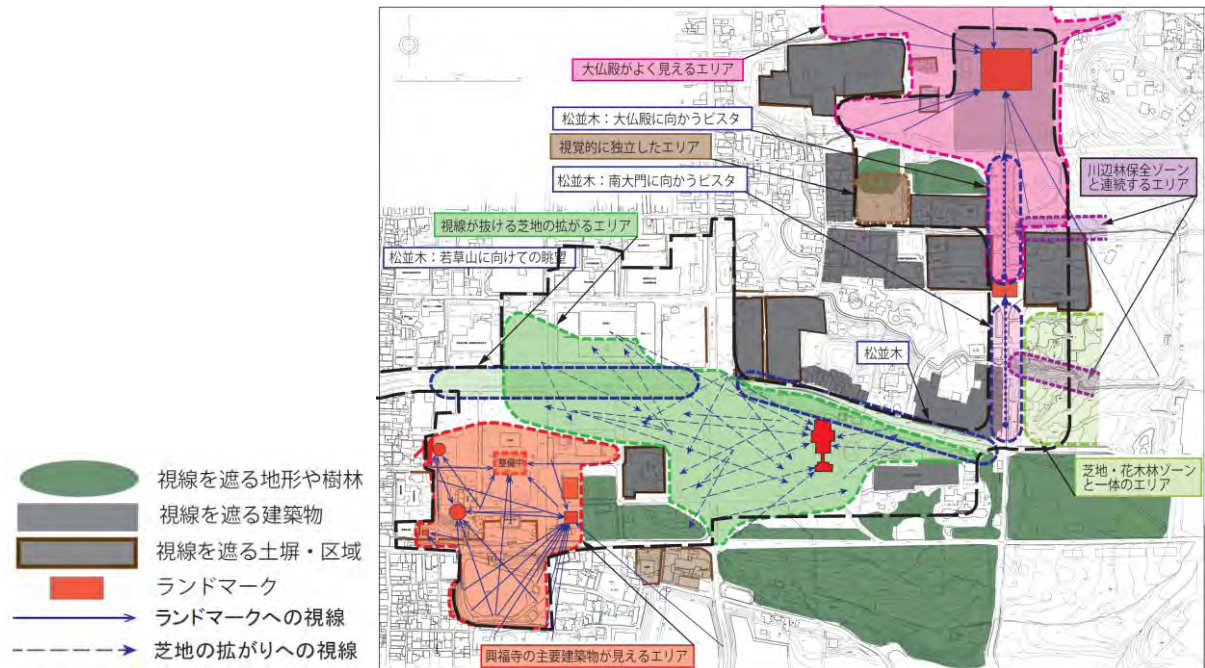


土地利用・植栽整備	奈良～	桃山～江戸	明治・大正	昭和(戦前)	昭和(戦後)
建築物(ランドマーク)	■	■	■	■	■

図：土地利用・植栽整備・建築(ランドマーク)の時代区分

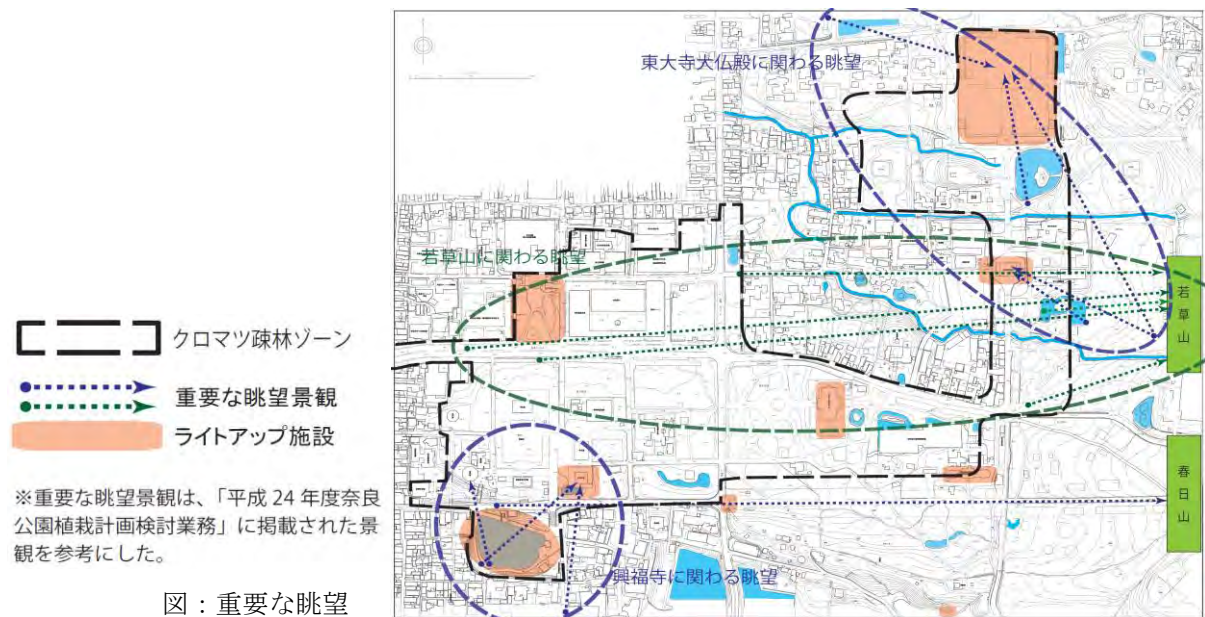
○景観特性からみると、興福寺と東大寺（大仏殿）の境内景観のエリアと都市公園や博物館構内等の開放的な景観のエリアに大別される。

- ・興福寺と東大寺（大仏殿）の境内は、建築物や土塀、地形変化等によって視線が制限されており、ランドマークとなる歴史的建築物に視線が集まる。境内には芝地はあるものの限定的で、敷地外に視線が抜ける箇所は少ない。
- ・都市公園と博物館構内は、一部に建築物があるものの、密度の高い松林と芝地の拡がり連続しており、周囲に視線が抜ける。



図：ランドマークや景観特性によるエリア区分

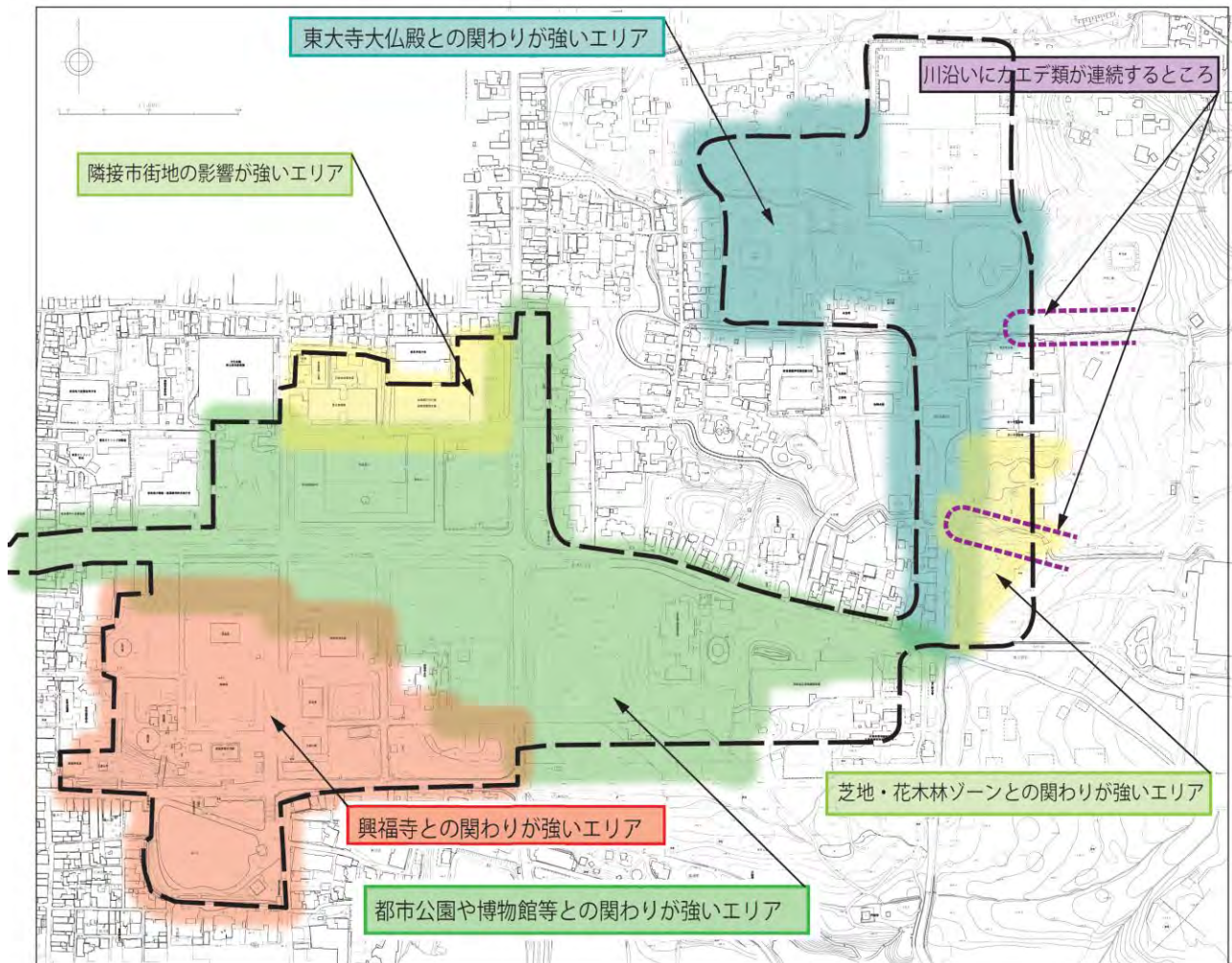
- ・重要な眺望としては、興福寺に関わる眺望、東大寺大仏殿に関わる眺望、若草山に関わる眺望がある。



図：重要な眺望

特性まとめ

- ・クロマツ疎林ゾーンは、「興福寺との関わりが強いエリア」「東大寺大仏殿との関わりが強いエリア」「都市公園・博物館等との関わりが強いエリア」のエリアに大別される。
- ・「興福寺との関わりが強いエリア」「東大寺大仏殿との関わりが強いエリア」は、奈良時代から続く歴史的建築物や境内地としての土地利用があり、植栽や景観もそれが核となっている。
- ・「都市公園・博物館等との関わりが強いエリア」は、明治以降に土地利用・植栽整備されたものであり、「見通しの良い松林と芝地」が特徴となっている。
- ・いずれのエリアも古くからマツが見られ現在もクロマツが全体を覆い、それが景観の特徴となっている。



(3) 計画方針

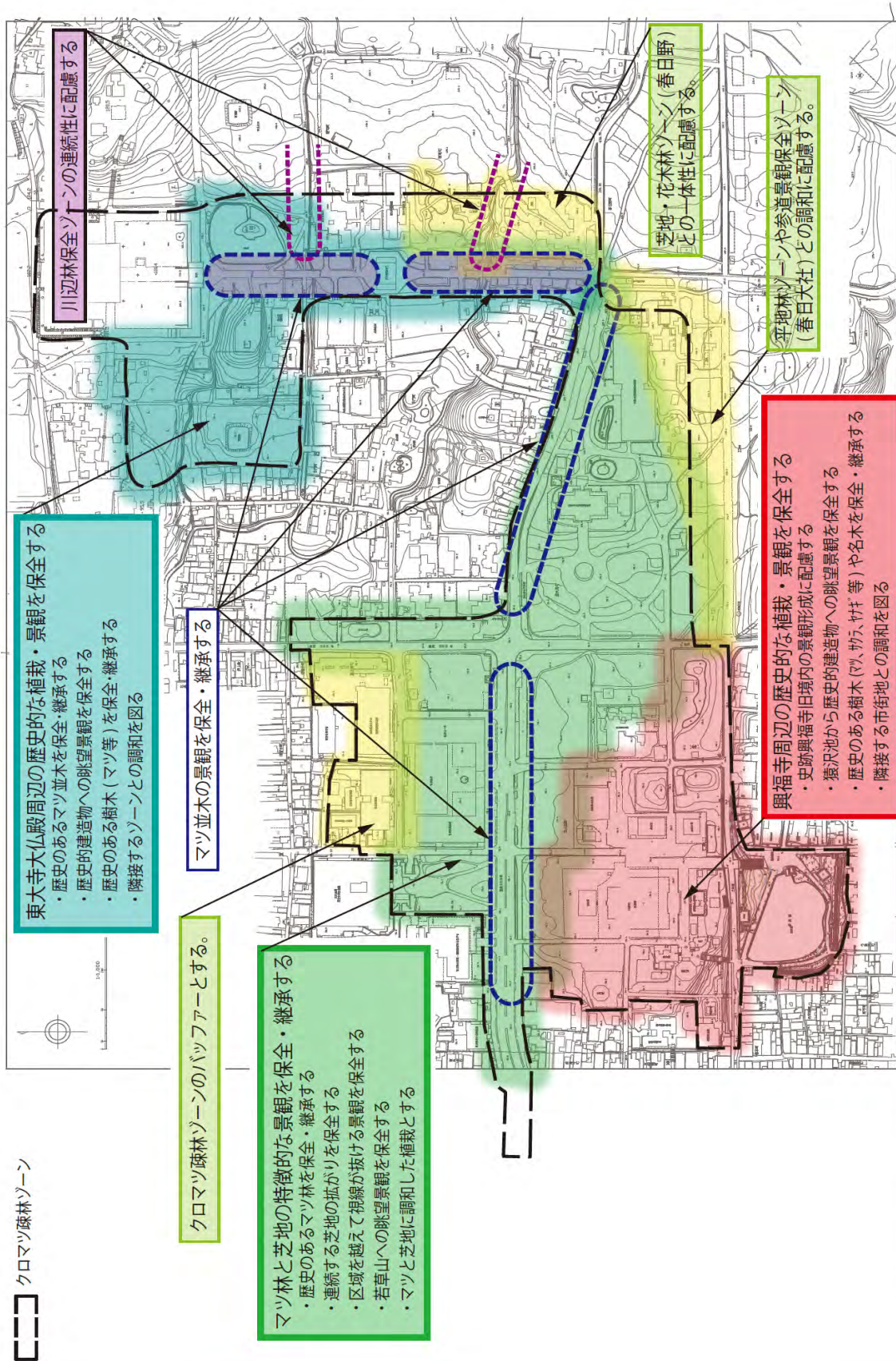
計画方針：

クロマツ疎林を基調として歴史・文化と調和した格調高い植栽・景観を保全・継承する。

クロマツ疎林ゾーンは古くから風致を高めるためにマツやサクラなどが植栽され、現在もクロマツを主体とした植栽によって歴史文化的な風致景観が保全・継承されている。そして、土地利用や植栽整備の歴史が植栽や景観に色濃く反映されており、この視点から見ると「興福寺との関わりが強いエリア」「東大寺大仏殿との関わりが強いエリア」「都市公園・博物館等との関わりが強いエリア」という3つのエリアに大別される。これらは、奈良公園の歴史文化そのものであり、奈良公園の魅力の最も重要な構成要素である。

よって、クロマツ疎林ゾーンは“クロマツ疎林を基調として、歴史や文化と調和した格調高い植栽とそれによって形成される良好な景観を保全し、これを継承する”ことを計画方針とする。

クロマツ疎林ゾーン



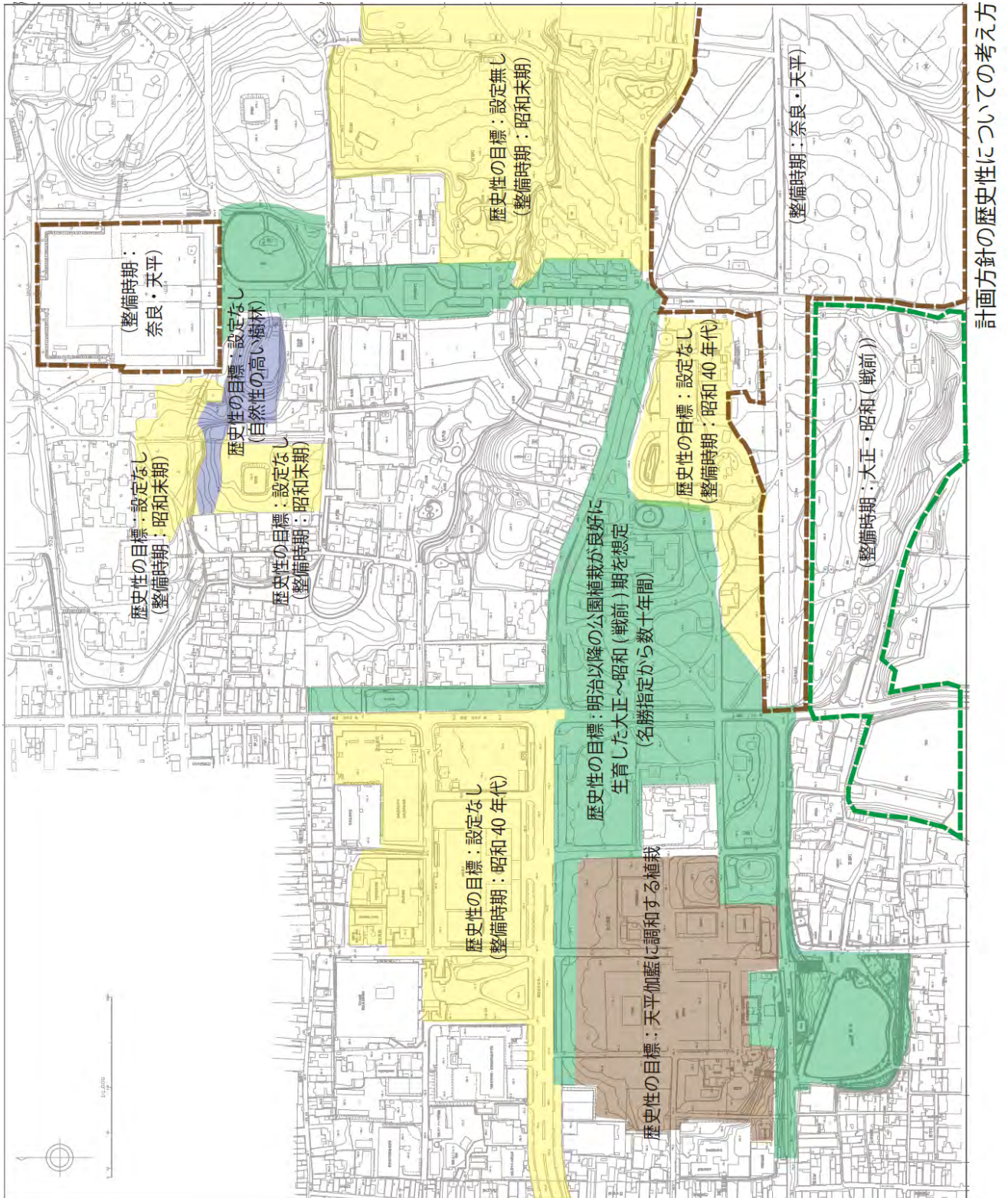
クロマツ疎林ゾーン計画方針：クロマツ疎林を基調として歴史文化と調和した格調高い植栽・景観を保全・継承する。

クロマツ疎林ゾーンの計画方針

図：計画方針図

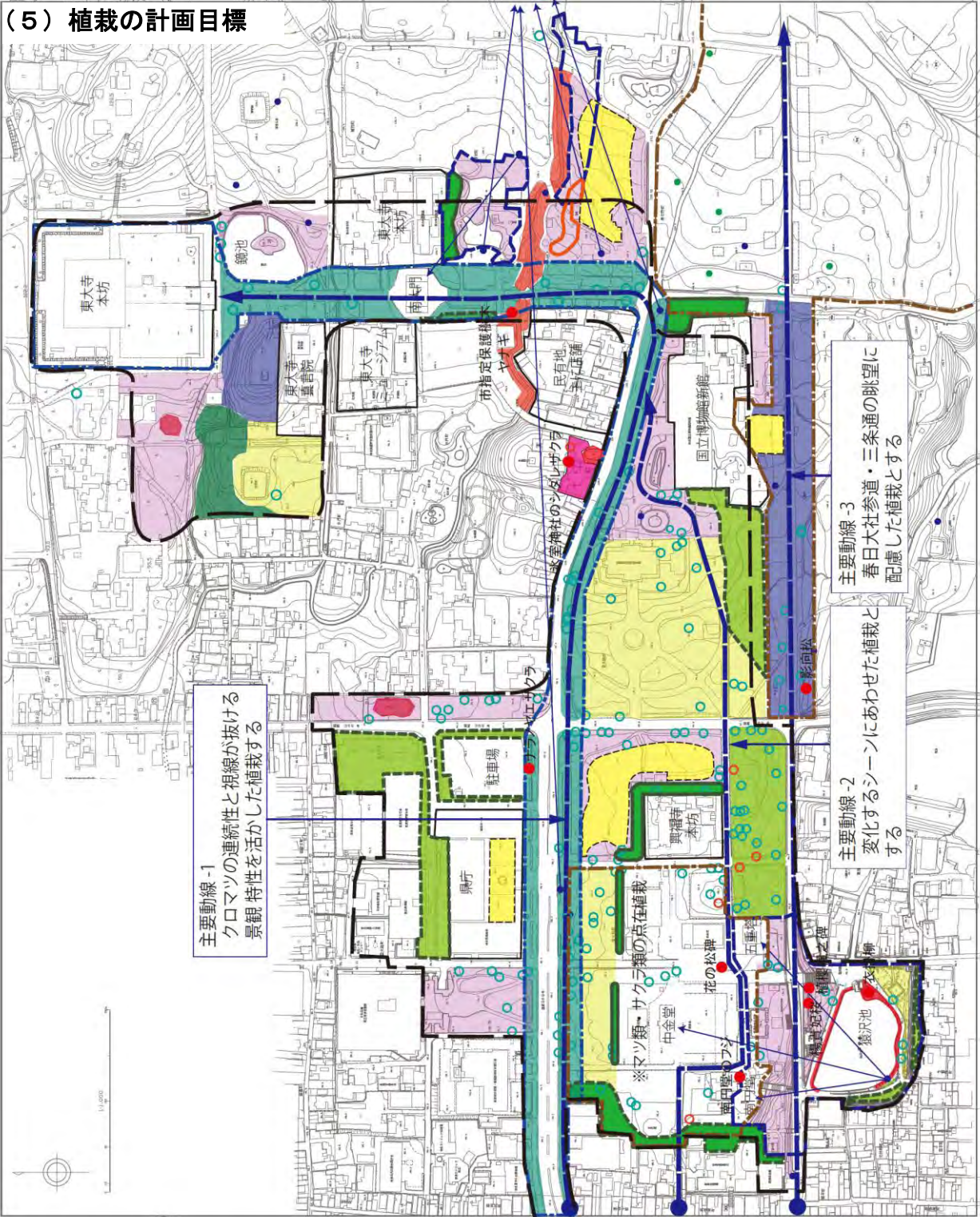
(4) 計画方針の歴史性についての考え方

計画方針図に記述されている“歴史性”については、植栽の計画目標を設定するという観点から、その考え方を下図のとおり整理した。



図：計画方針の歴史性についての考え方

(5) 植栽の計画目標



クロマツ疎林ゾーン 計画目標

クロマツ疎林ゾーン

- マツ類 大木
- サクラ類 大木
- 巨樹・巨木
- イチイガシ巨樹群 (市指定天然記念物含む)
- いわれのある樹・名木・石碑
- ナンキンハゼ保全検討範囲

史跡の景観形成に配慮する区域

シークエンス景観に配慮する区域

シークエンス景観に配慮する動線

眺望景観に配慮する区域

主要眺望点と視線

緩衝植栽 (低密度)

緩衝植栽 (高密度)

目標植生

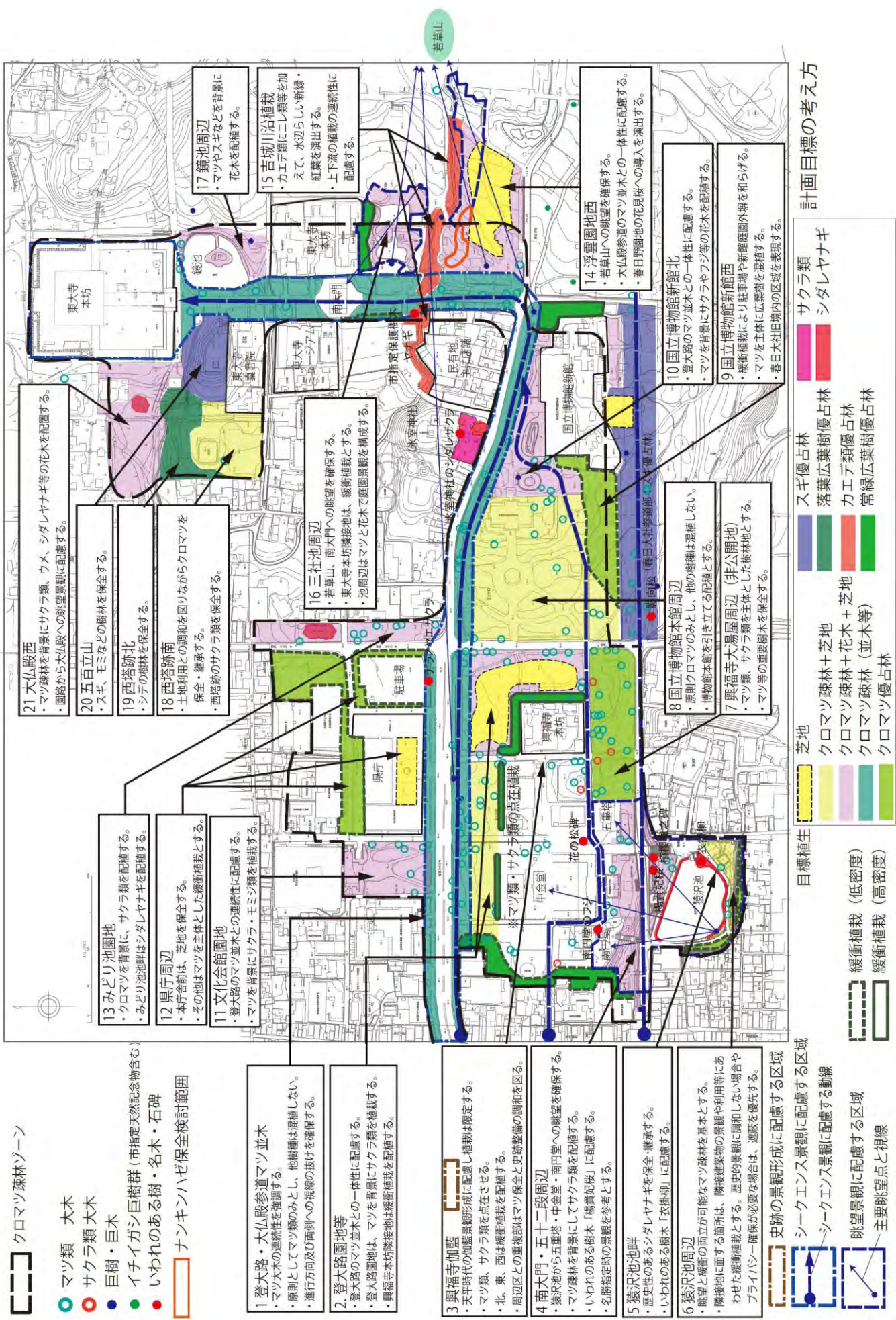
- 芝地
- クロマツ疎林+芝地
- クロマツ疎林+花木+芝地
- クロマツ疎林 (並木等)
- クロマツ優占林
- スギ優占林
- 落葉広葉樹優占林
- カエデ類優占林
- 常緑広葉樹優占林
- サクラ類
- シダレヤナギ

主要動線-1
クロマツの連続性と視線が抜ける
景観特性を活かした植栽する

主要動線-2
変化するシーンにあわせた植栽と
する

主要動線-3
春日大社参道・三条通の眺望に
配慮した植栽とする

図：計画目標



クロマツ疎林ゾーン

- マツ類 大木
- サクラ類 大木
- 巨樹・巨木
- イチイガシ巨樹群(市指定天然記念物含む)
- いわゆるのある樹・名木・石碑
- ナンキンハゼ保全検討範囲

- 1 登大路・大仏殿参道マツ並木
 - ・マツ並木の連続性を強調する。
 - ・原則としてマツ類のみとし、他樹種は混植しない。
 - ・進行方向及び西側への視線の抜けを確保する。
- 2 登大路園地等
 - ・登大路のマツ並木との一体性に配慮する。
 - ・登大路園地は、マツを背景にサクラ類を植栽する。
 - ・興福寺本坊隣接地は緩衝植栽を配置する。

- 3 興福寺伽藍
 - ・天平時代の伽藍景観形成に配慮し植栽は限定する。
 - ・マツ類、サクラ類を点在させる。
 - ・北、東、西は緩衝植栽を配置する。
 - ・周辺区との重複部はマツ保全と歩路整備の調和を図る。
- 4 南大門・五十二段周辺
 - ・猿沢池から五重塔・中金堂・南円堂への眺望を確保する。
 - ・マツ疎林を背景にしてサクラ類を配置する。
 - ・いわゆるのある樹木「揚貴妃塚」に配慮する。
 - ・名勝指定時の景観を参考とする。

- 5 猿沢池畔
 - ・歴史性のあるシダレヤナギを保全・継承する。
 - ・いわゆるのある樹木「衣掛柳」に配慮する。
- 6 猿沢池周辺
 - ・眺望と緩衝の両立が可能なマツ疎林を基本とする。
 - ・隣接地に面する箇所は、隣接建築物の景観や利用等に合わせた緩衝植栽とする。歴史的景観に調和しない場合やプライバシー確保が必要な場合は、遮蔽を優先する。

- 史跡の景観形成に配慮する区域
- シークエンス景観に配慮する区域
 - シークエンス景観に配慮する動線
 - 眺望景観に配慮する区域
 - 主要眺望点と視線

- 目標植生
- 芝地
 - クロマツ疎林+芝地
 - クロマツ疎林+花木+芝地
 - クロマツ疎林(並木等)
 - クロマツ優占林

- スギ優占林
- 落葉広葉樹優占林
 - カエデ類優占林
 - 常緑広葉樹優占林

- サクラ類
- シダレヤナギ

計画目標の考え方

- 21 大仏殿西
 - ・マツ疎林を背景にサクラ類、ウメ、シダレヤナギ等の花木を配置する。
 - ・園路から大仏殿への眺望景観に配慮する。
- 20 五百立山
 - ・スギ、モミなどの樹林を保全する。
- 19 西塔跡北
 - ・シデの樹林を保全する。
- 18 西塔跡南
 - ・土地利用との調和を図りながらクロマツを保全・継承する。
 - ・西塔跡のサクラ類を保全する。
- 17 鏡池周辺
 - ・マツやスギなどを背景に花木を配置する。
- 16 三社池周辺
 - ・若草山、南大門への眺望を確保する。
 - ・東大寺本坊隣接地は、緩衝植栽とする。
 - ・池周辺はマツと花木で庭園景観を構成する。
- 15 吉城川沿植栽
 - ・カエデ類にニレ類等を加えて、水辺らしい新緑・紅葉を演出する。
 - ・上下流の植栽の連続性に配慮する。
- 14 浮雲園地西
 - ・若草山への眺望を確保する。
 - ・大仏殿参道のマツ並木との一体性に配慮する。
 - ・春日野園地の花見坂への導入を演出する。
- 10 国立博物館新館北
 - ・登大路のマツ並木との一体性に配慮する。
 - ・マツを背景にサクラやアジ等の花木を配置する。
- 9 国立博物館新館西
 - ・緩衝植栽により駐車場や新館屋外扉を和らげる。
 - ・マツを主体に広葉樹を混植する。
 - ・春日大社旧境内の区域を表現する。
- 8 国立博物館本館周辺
 - ・原則クロマツのみとし、他の樹種は混植しない。
 - ・博物館本館を引き立てる配植とする。
- 7 興福寺大湯屋周辺(非公開地)
 - ・マツ類、サクラ類を主体とした樹林地とする。
 - ・マツ等の重要樹木を保全する。

図：計画目標の考え方